

♂俺はグランのはずだ
よな？♀

Wuming

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日グランくんが女の子になつてしまつたそんな騎空団のお話
中身的にはボーカズラブなNLだつたり中身的にはNLな百合など、ちやまぜ予定
更新は亀。

プロローグ

目

次

プロローグ

目が覚めたら、ないはずのものがあつて、あるべきところにあるはずのものがありますでした。

いつもの通り頼まれた依頼をこなして、グランサイファーの中で眠りについたはず。よくある妙な夢を見るだとか、身体が熱いとかそういうことは全くなく爽快な目覚めを迎えた……のに目を開けたら妙に髪が伸びてた。おかしいなと思いながら胸のあたりに視線を落とすとあるはずのない膨らみがあつて慌てて前のボタンを外してみたら女の子みたいな胸があつて、そのまま全部脱いで下を見てみると股間にあるはずのものが、綺麗さっぱりない。挿んでるとかそういうのではなく根本的にない。嘘だろ、これじゃまるで女の子だ。あわてて鏡の前に立つ。そこには俺の姿ではなく……肩より少し上のショートカットの、俺と同じ髪の色をした可愛らしい女の子が驚愕の表情を浮かべて裸でつつ立っていた。

「うええええええええええええええ!?」

思わず悲鳴が出たけど明らかに俺の声じやなくともつと高い。なにこれ。俺の悲鳴を聞きつけたのかドタドタ走つてくる音がする。あ、でも俺まだ裸でこの足音は明らか

に野郎の……

「おいグララン！どうした！」

「うわああああああああああああ馬鹿!! いきなり開けるなあ!! ドア閉めろおおおおお!!!」
案の定駆けつけたラカムが勝手に部屋のドア開けた。シーツまであとちょっととのところで。注意するために叫んで、あわててシーツをひつつかんで身体に巻きつける。前は見られてないけど裸を見られた。たぶん。振り向くとラカムは目を瞑つてそっぽを向いていた。

「…………なあラカム、俺の裸……見た？」

「……お前、もしかしてグラランか？」

「見た？」

今大事なのは俺がグラランかどうかより悲鳴を聞いて駆けつけたとはいえこいつが女の子の裸を見たか見てないかだ。気まずそうにこつちを見てすぐにまた視線を逸らしたラカムは頭をボリボリ搔いて、少し考えてから口を開いた。

「……見えちまつた。けど一瞬だぜ？」

「わかつた。そのままいますぐドアから部屋から出てつてカタリナとルリアを連れてこい。いいな？」

「ハイ、ワカリマシタ」

俺の剣幕におされたのか、ラカムはそれ以上言い訳をすることなくくるつと踵を返して部屋を出て行つた。つてあいつ、ドア閉めずに行きやがつて。

とりあえずドアを閉めて脱いだ服を着ることにした。なんか変な感じはするけど、裸にシーツ引っ掛けてるよりかはマシになるはずだ。服を着てへなへなベッドに倒れこむ。はあ、なんてこつた。とんでもないことになつた。一体どうしてこんなことになつた。……